

令和3年度 南アルプス市立若草南小学校 前期自己評価書

南アルプス市立若草南小学校

校長 河野 瑞穂

● 学校教育目標

「学びを深め、心豊かなたくましい子ども」

〔具体目標〕

- (1) 自ら学び、深く考える子ども (知)
- (2) 豊かな心で、思いやりのある子ども (徳)
- (3) 体をきたえ、最後までやりぬく子ども (体)

〔目指す学校像〕 笑顔あふれる学校
学び合い 高め合い 信頼し合う 地域と共にある学校

〔育てたい児童像〕 人の痛みがわかる思いやりのある児童
自分の考えをもち、チャレンジする児童
若南プライドをもち、ふるさとを愛する児童

〔若南プライド〕

地域の歴史・伝統・文化に気づき、自ら学び、体験する中で 地域に誇りを持ち、自尊心を高める
積極的な活動に取り組む精神・自他の尊重・多様性を認め合う精神

〔学校経営の重点〕

1 児童や地域の実態をふまえた適切な教育課程の編成と実施に努める。

- (1) 新学習指導要領の理念をふまえた児童や学校の実態に応じた教育課程の編成
- (2) 幼稚園・保育園・若草小学校・若草中学校との連携を考えた教育課程の編成
- (3) 各教科や道徳、総合的な学習の時間、学校行事を含めた特別活動などの横のつながりと異学年間の縦のつながりを考えた効果的な教育課程の編成
- (4) 全教育活動を通じた体系的なキャリア教育の推進
- (5) 学校内外の教育資源の活用と体験学習の充実

2 「自ら学び 深く考える子ども」の育成を図る。

- (1) 学習意欲の向上や基礎的・基本的事項の確実な定着を意識した授業づくり
(反復繰り返し学習、市単講師によるTTや少人数指導)
- (2) 学習スタンダードに基づいた授業を実践する。
(若南スタンダードの定着化、問題解決的な学習展開、見通しと「対話」のある授業づくり)
- (3) 思考力・判断力・表現力を高めるためのコミュニケーション能力の進展
(ICTの利活用、単元末評価問題の活用、協働的学習体制の充実、外国語教育の充実)
- (4) 組織的・計画的・継続的な校内研究の充実

(学級づくりと授業実践を中心とした校内研究の推進, 一校一実践・一人一実践の取組)

(5) 家庭学習の習慣化とアウトメディアの取組

(家庭学習の手引きの活用, 家庭学習取組強化週間, 主体的に取り組む学びノートの活用)

3 「豊かな心で 思いやりのある子ども」の育成を図る。

(1) 自分の大切さとともに他の人の大切さを認める人権教育の推進

(人権尊重の理念に基づく教育活動, 話の聞き方 認め合い名人・あいづち名人)

(2) 全ての子の居場所のある居心地の良い学級経営の充実

(所属感, 自己有用感, 自己肯定感を持たせる取り組みの工夫, Q-Uの活用, 学校生活アンケートの活用, SOSの出し方に関する教育の実践)

(3) 学校教育全体を通して道徳教育の充実 (考え議論する道徳の推進)

(4) 児童会を中心とした仲間づくり・集団作り

(あいさつ運動, 縦割り班活動, ボランティア活動)

(5) 読書活動・音楽活動の推進

(朝読書の効果的実施, 図書集会の活用, 読み聞かせの取組, 歌声タイム, 音楽会)

(6) 集団生活のルールやマナーの徹底

(月ごとの生活目標, あいさつ運動, 無言清掃, 全校集会や全校放送の活用, 若南プライド「心のやりとりきちんといさつ・心に向ける返事・心をそろえるくつそろえ」)

4 「体をきたえ 最後までやりぬく子ども」の育成を図る。

(1) 運動の日常化による基礎体力づくり

(体育的行事の計画的実施, 「健康・体力づくり一校一実践運動」の取組)

(2) 粘り強く最後までやり抜く強い意志を育てる指導支援

(体育授業の充実, 粘り強さを大切に学習指導の充実)

(3) 基本的な生活習慣の確立と保健指導の充実, 給食指導を中心に食育の充実

(たよりや掲示物, 学級指導, 保健集会の活用, 給食週間の取組)

5 特別支援教育(特別支援学級・通級指導教室)の充実に努める。

(1) 児童の実態に応じた特別支援学級の運営

(2) 特別支援教育の視点を取り入れた学級経営

(特別支援学習会の実施, ユニバーサルデザインの活用)

(3) 交流学級・在籍学級の担任, 保護者・関係諸機関との連携を活かした指導支援の充実

(機能的なケース会議開催, 外部の専門機関や関連行政機関との連携, 「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成と活用)

(4) サポートルーム若草南のセンター的機能の充実

(校内外のニーズをもつ児童のアセスメント, 教育相談)

6 児童の安全・安心を守り, 家庭や地域に開かれた学校づくりを推進する。

(1) 全教職員が「一致協力」, 連携・協働し支え合う教職員組織「チーム若南」

(2) 自らの命は, 自ら守る「危険回避能力」の育成

(地震・火災想定避難訓練, 不審者対応訓練, 救命救急法訓練, 引き渡し訓練
交通安全教室・自転車教室の実施, 防犯講話, 危機管理マニュアルの充実と改善)

(3) 保護者や地域住民と連携・協力した教育活動の展開

(地域・地域人材活用, 地域行事への参加・地域貢献)

(4) 小中一貫教育の推進

- (若草中学校区小中一貫教育推進協議会の推進，若草地区小中3校との交流，教科担任制)
- (5) 学校評価や保護者アンケートを活かしたPDCAサイクルによる学校運営，教育方針の改善
(自己評価・学校関係者評価の実施，児童・保護者アンケートの実施，行事ごとの教職員や保護者アンケートと総括の実施)
- (6) 授業参観，各種たより，HP，安心メールによる情報発信
(学校開放日，授業参観，学校行事への参加等教育内容の積極的公開，学校通信・学年通信・学級通信・保健だより・図書だより・給食だより等の発行，HPでの情報発信や安心メールを使った緊急連絡の活用)
- (7) 学校評議員制度の効果的な活用とPTAや地域との連携協力
(地域ボランティアの活用，学校評議員会の開催，PTA専門部の活動)

【評価方法】

児童，教職員に対して，アンケート用紙により回答を得た。

質問に対しての回答選択肢は4段階になっている。

A：そう思う

B：ほぼそう思う

C：あまりそう思わない

D：そう思わない

の4段階で，このうちAとBは肯定的なプラス評価であり，CとDは否定的なマイナス評価である。AとBのどちらを選ぶか，CとDのどちらを選ぶかについては，回答者の判断材料の有無・回答時点の状況等が関係するため，A・B・C・Dを厳密に区別して集計することよりも，A・B合わせてのプラス傾向，C・D合わせてのマイナス傾向として集計する方が，全体的な傾向をつかみやすくなる。そこで，各項目の回答に占める「A・B」の割合，「C・D」の割合を求め，

○「A・B」の割合が大きいほど肯定的評価（プラス評価）

○「C・D」の割合が大きいほど否定的評価（マイナス評価）

と判断をした。

1 第1回児童アンケートの考察

【全体的な傾向】

全10の質問項目中，肯定的評価が90%以上の項目が8つ，80%以上の項目が2つであり，全体的に肯定的評価が多い。児童の学校生活は概ね満足していると考えられる。しかし，肯定的評価の「そう思う」の割合と「ほぼそう思う」の割合では，「そう思う」が80%以下である項目がみられる。次の7つの項目については課題があるにとらえ，指導の改善を図っていきたい。

1の項目「学校へ行くことが楽しいですか」について

「学校が楽しい」と感じている割合は，94.3%と肯定的な評価は高い。肯定的な回答の中で「そう」は69.3%，「ほぼ」は25.0%であり，あまりそう思わない4.6%，そう思わない1.1%と回答してい

る。すべての児童が楽しいと思える学校生活を送ることができるよう改善を図りたい。

2の項目「あいさつをしっかりとしていますか」について

「あいさつをしている」と思っている割合は、94.3%と肯定的な評価は高い。昨年度よりも4ポイントほど高くなっている。肯定的な回答の中で「そう」は61.81%、「ほぼ」は32.5%である。今年度の児童会活動では、児童会役員が玄関に立ち、「目を見て元気にあいさつしよう」と取り組んできた成果も影響があると思われる。気持ち良いあいさつが人間関係を形成したり、一日のよいスタートになったりすることを実感できるような運動を今後も継続させたい。

4の項目「学校の授業がわかりますか」について

「学校の授業がわかる」ことは、学校生活を送る上で最も大切なことの一つである。児童の肯定的な回答は96.4%であり、否定的な回答は3.6%という結果であった。概ね満足できる結果である。しかしながら、「そう思う」の割合は64.6%であり、感染症対策による4月・5月の臨時休校で、家庭学習の期間が長くなった昨年度と比較すると大きな差はない。児童が自信をもって「授業がわかる」と回答できるように、教師は児童の振り返りや定着の様子を確認していく必要がある。今まで以上に授業改善に努力し、特に否定的な回答をした3.6%の児童に対し、授業がわかり楽しいと感じられるように、基礎基本を大切に授業を展開していきたい。継続と積み上げを意識したTTの活用についてもさらに研究を深めていきたい。

6の項目「授業中に発言や質問または意見を言いますか」について

肯定的な回答は、81%であり、昨年度の前期78.1%と比較すると若干ポイントが高くなっている。「そう思う」の割合が47.1%となり、質問項目の中で最も割合が低い。昨年度からの新型コロナウイルス感染症対策による「新しい生活様式」により、これまでの「学び合う」学習活動が制限され、児童の意識も低下していると思われる。また、4年生以上で「そう思う」の割合が低くなっていることから、今後の生活様式の中で可能な授業改善を図る中で、児童が自ら進んで学習に取り組めるような授業が可能となることを期待したい。

7の項目「家庭で宿題や自主学習を自分から進んでしていますか」について

肯定的な回答は、81%（昨年度77.2%）であり「そう」の割合が65.6（昨年58.1%）であり、家庭学習や自主学習への意識が高くなっていると考えられる。家庭学習見守り週間や自主学習への励ましの成果が徐々に表れていると言える。学力向上と家庭での学習の時間には相関関係があると言われている。家庭学習の取り組みは昨年度の保護者アンケートで課題がある項目と認められた。家庭学習強化週間をもとに、日頃の取組が継続できるよう、保護者への協力を含め、児童が自ら進んで学習に取り組めるよう研究を進めていきたい。

8・10の項目「困っただれかに相談できますか」「いじめや悪いことをしている人を見たら、先生や友だちに言えますか」について

児童は、日常生活の中で様々な困難に遭遇する。一人で考えこんだり悩んだりせずに、相談できる人がいることはとても大切である。「相談できますか」「言えますか」での否定的な回答が13.6%、9.6%みられる。誰にも相談できない、言えない児童がないように、定期的なアンケートも効果的に

活用するとともに、日頃から一人ひとりの児童にしっかりと目を配り、声をかけ、児童が孤立しないような指導を継続していきたい。

2 第1回職員アンケートの考察

【全体的な傾向】

教職員自己評価の結果は、すべての質問項目において肯定的回答が多数を占め、学校長の指導の下、学校教育目標達成のために全職員が協力して努力していることがわかる。

I 学校生活について

「子どもたちが、楽しく学校生活を送れるように努めている」については、「そう思う」の割合が高く、教職員の意識も高いことがわかる。子どもたちが、学校は楽しいと思い、通学することは学校・保護者・地域の共通の願いである。学校評価アンケート、学校生活アンケートなどでマイナス傾向の児童にしっかりと目を向け、すべての児童がプラス評価になれるよう努めていきたい。

「すすんであいさつをする指導の充実」については、「そう思う」の割合が 59.3%であった。「あいさつは児童理解の一步である」という観点から、教職員の意識を高め、人間関係の形成を図れるように「あいさつ＋一声」を実践していきたい。「あいさつの声が小さい」と感じている職員もいるので、教職員・児童会等が率先してあいさつして、手本となるよう継続して取り組んでいきたい。

II 学習指導について

「児童を授業に集中させるための指導」では、「そう思う」の割合が 86.4%であった。集中できる授業、質の高い授業の実施を目指し、教職員の意識も高いことがわかる。校内 OJT では、若手育成のための授業参観と意見交換が計画的に行われており、本校の特色の一つになっている。

わかりやすい授業の展開と児童の学力向上は、学校に課せられた最も大切な課題の一つである。「学校の授業がわかりますか」について否定的な回答をした 3.5%の児童にしっかりと目を向け、「基礎的な学力の定着」を意識し、学習の振り返りや個別指導をふまえた取組について校内で共通理解を図り、一人一人の授業改善を進めていきたい。一人一台 PC の利用が児童の意欲向上につながっていることも検証しながら、進めていきたい。

III 家庭学習について

「家庭学習を定着させるための工夫」では、「そう思う」は 59.1%であり、マイナス評価はなかった。家庭学習強化週間の取り組みでは、チェックシートの内容を検討し、自分のめあてと保護者の励ましの言葉などの記入欄を工夫した。また、2回目に実施する際に1回目を振り返られるように紙面構成に継続性をもたせた。学級だよりで、学びノートのことを取り上げ、保護者へ周知することも行っていた。このようにお互いのノートを見せ合う、掲示する、学級通信で紹介するといったことで、児童の意欲の向上、より良い学習につながっていくと思われる。

家庭学習は、保護者の協力が必要不可欠である。全校での取り組みや学年・学級での取り組みをさらに進め、家庭学習の定着を図り、さらに進めていきたい。

IV 生徒指導について

一人一人が自己肯定感、自己有用感を感じられる居心地の良い学級づくりが、楽しい学校生活の

基盤となり、学習活動を支える基盤となる。様々な児童がいる中で学級経営をしていくことは大変であるが、お互いの良いところを認め合う活動をたくさん仕組み、一人一人が大切にされていると実感できる居心地の良い学級をめざしていく。

生徒指導上、様々な諸課題があり、その都度、校長を中心とし組織的に対応している。また、保護者と連携を図って取り組むことが不可欠である。不登校やいじめ等につながる兆候の早期発見と早期対応に努めるとともに、これからも、報告・連絡・相談を密に行い、管理職・生指担当・養護教諭・コーディネーター等を中心とし、組織的に対応していきたい。

V 学校経営について

校務分掌については、なるべく主・副と複数で運営するようにしながら、若手や中堅教諭が連携して推進できるように配慮された。刻々と変化する、新型コロナウイルス感染症対策の対応や、元に戻ろうとする事業・研修、それに伴う調査等に追われることも多く、1学期の教育活動をふり返ってみると、分掌によって負担の差が生じたように感じたり、多忙化を解消することが大変だったりしたと思う。

ICT 関連での専門部を組織し、日常的に情報発信したり、研究の中で共有化したりすることにより、本校の GIGA スクールに対する取組は、概ね満足できる内容であったと思う。

これからも、縦と横の連携を十分に図り、若草南小児童の健全育成のために、一致団結して教育活動に取り組んでいきたい。

VI 学校行事について

新型コロナウイルス感染症対策のため、多くの行事について、昨年度の経験を生かし、また、状況に応じた判断をする中で、共通理解を図っている。「子どもたちが楽しく参加できるように計画されている」という面においては、できる範囲で工夫されていると思われる。

行事にかかわらず、様々な場面における児童指導も、保護者・地域に発信し理解してもらうことも順調に進めることができたと思う。今後も目的をしっかりと見据え、児童の安心安全を第一に考え、無理のない計画の中で取り組んでいきたい。

VII 校内研究、特別支援教育について

校内研究では、ICT 教育を進めながら、「新しい生活様式」の中で、児童に身に付けさせたい力を伸ばしていくことが私たち教師に課せられた大きな課題である。授業を計画的に進めながら、ICT 活用を念頭に据えた組織的な運用がスタートできたことは評価できる。校内研究会は、内容も工夫され、学び合う雰囲気がよく、勉強になる。また、校内 OJT では、それぞれの要望が学習会の中に反映され、若い教職員同士で学ぶ機会や、ベテランの教職員から学ぶ機会が設けられ、若い先生の悩みや困り感を共有できていた。2学期以降も状況を考慮しながら、研究主任を中心に、授業研究を含めて研究を進めていきたい。

特別な配慮が必要な児童が多く、担任の負担が大きい。しかし、交流学級、支援級、養護教諭、教務の教職員が連携して力を発揮している。

VIII 施設・設備・安全管理について

昨年度実施できなかった交通安全教室が実施できたこと、防犯教室や避難訓練も方法を工夫し

ながら実施できたことは良かった。1学期末には、スクールサポーターや南アルプス警察署のご協力のもと、不審者対応や交通安全について学ぶことができた。また、水泳指導につながる共通教材を視聴することで、水泳指導に代わる措置ができた。

養護教諭、給食主任、教科主任から様々なコロナ対策についての情報提供や保健指導の発信があった。教職員が協力・理解し、細部まで目を行き届かせた指導をすることができたと思う。

今後は、定期的な訓練や安全教育を通し、日頃から防犯・防災の意識を高める児童指導にあたりたい。また、保護者や地域住民の協力も欠かせない。通学路については、地域・見守り隊の方々の献身的な働きかけで、改善が図られている。本当に感謝したい。今後も見守りたすきの普及や小中連携なども含めて、地域で児童を見守る学校づくりを進めていきたい。

IX 学校と家庭との連携についての質問

学校と保護者が共通理解を図り、同じ歩調で進むことが望まれる。PTA総会や学年部会が紙上提案となったが、混乱もなく、一応ご理解していただいたものと評価できる。その背景には、保護者と教職員の連絡・連携が密に行われ、信頼関係を築くことができたことがあげられる。4月から5月にかけて、授業参観や家庭訪問が実施できたことも、学校と児童と保護者をつなぐ機会としてとても良かったと思う。

3 まとめ

アンケート調査の結果を見ると、児童・教職員とも、すべての項目でプラス評価がマイナス評価を上回っている。日常行われている教育活動を継続していくことが大切であるといえる。

しかし、マイナス評価が大きい割合になっているいくつかの項目や、日ごろの教育活動から感じられる課題点も明らかになった。それらをまとめると、次のようなことになる。

【学校生活について】

- 学校が楽しいと思わない否定的な回答をした児童にしっかりと目を向け、思いを聞き、課題となっていることは何かを把握して、児童一人ひとりにしっかりと対応していく。また、「困ったときに誰かに相談していいよ」というメッセージを送りながら、全職員で共通理解を図り、指導にあたりたい。
- あいさつを心の交流の第一歩として、教職員、児童会を中心に率先して行っていく。

【学習について】

- 授業に集中させるための授業指導については高い評価を得られた。2学期以降の教育課程および学習内容と時数を再確認し、基礎基本の定着を図ることを主眼に置いた学習活動の工夫ができるようにする。ICT活用も基礎基本の定着の一助となり得るので、発達段階に応じてドリル学習を取り入れていきたい。また、発言または意見を発表することと合わせて、友だちの意見にうなずき、しっかりと聞くこと、質の高い学び合いにつながっていくようにすることに取り組んでいく。これらのことは学力を向上させる上でも大切なことである。

- 安心して発表ができる雰囲気のある学級をつくっていくことは、互いを認め合うことにもなり、いじめのない学級づくりにも通じている。校内研究会の充実とともにさらに授業改善を図っていきたい。
- 学習内容の定着や学力の向上において、家庭学習は大切な役割がある。現状、家庭学習の取組状況

には個人差が大きい。日々の取組や、家庭学習の内容や方法を工夫し、家庭学習を充実させていきたい。また、学校の取組だけではなく、保護者の理解を深め、今まで以上に協力を求めていきたい。

○特別支援学級の児童について、交流学級とより連携を図りながら、個別のニーズに合った指導をしていく。今後もケース会議等を開催し、共通理解を図りながら進めていく。

【生徒指導について】

○学年や教務、保護者、必要に応じて関係機関と連携を図って取り組むことを大事にしていきたい。組織的・継続的な取り組みが諸問題の解決につながっていく。学校のきまりや約束を守ることの指導は、いじめや非行行動に対する未然防止につながっていくと考える。児童会や学級会のきまりなど、児童は学校生活の中で様々なきまりを守りながら社会性を身につけていく。

困ったときに相談する友達・大人がいることは、いじめの未然防止や早期発見に大きな役割を果たす。また、保護者からの情報提供も大きな役割を果たす。日頃の児童の様子からいつもと違うと感じたことが、いじめや問題行動に対する早期発見・未然防止につながっていくと考える。教職員は様々な情報を共有し、アンテナを高くし、すべての教育活動を通して、困っている子はいないか見据えていく必要がある。児童には、困ったときには誰かに相談すること、きまりや約束を守ることの大切さについてより一層重点をおき、指導にあたりたい。また学校では、いじめは絶対に許さないという毅然とした態度で教育活動を進めていきたい。

以上のような課題から、今後若草南小学校で取り組む重点項目を次のようにまとめた。

○『あいさつの響き合う学校づくり』『居心地のよい学級・学校づくり』を進める。

- ・児童会などの取り組みを活かし、学年や学級での活動を更に充実させ、また、若南プライド「心のやりとりきちんとあいさつ・心を向ける返事・心をそろえるくつそろえ」の浸透を図り、一人ひとりの児童のよさを認める活動、あいさつ運動を進める。
- ・支援が必要とされる児童にしっかりと目を向け、認め、励まししながら自信をもたせるとともに、自身の活動の振り返りを行い、次の行動に移せるように指導をしていく。

○『学力向上』に努める。

- ・基礎基本の定着を図り、「わかる授業」を進めていく。一人一台パソコンの活用が児童の意欲、基礎的学習定着の一助となるように、研究を進めていく。
- ・授業の中で、よく聞き、よく考え、発言する活動を今まで以上に取り入れていく。
- ・チームティーチング（複数教職員による授業）や校内 OJT の活用を今まで以上に充実させていく。
- ・「家庭学習」のさらなる充実、家庭との連携を図る。

○自他の尊重、思いやりのある児童の育成

- ・子どもたちに寄り添い、良さを認め伸ばしていく。教師と子ども、子ども同士の関係づくりをより一層進める。
- ・困ったときなど、誰かに相談できる人間関係づくりや雰囲気づくりに努めていく。
- ・いじめのない学級づくりの取り組みを、児童・保護者に伝えていく。

